

第640回北里医学会招待学術講演会

(H26.7.31)

神経終末アクティブゾーンの分子構造基盤と生理機能
—分子から精神神経疾患の病態解明へ向けて—

大塚 稔久 先生
(山梨大学医学部生化学講座・教授)

学習や記憶、情動といったヒトの脳高次機能を担う神経回路網の基本ユニットは、神経細胞間の接着部位・シナプスとして知られている。前シナプスには、比較的電子密度が高いアクティブゾーンと呼ばれる構造体が存在し、神経伝達物質の放出を時間的・空間的に厳密に制御している。近年、このアクティブゾーン特異的タンパク質がいくつか同定され、それらの機能解析が非常に勢いで進められてきた。本講演では、私共が見出した新規アクティブゾーンタンパク質CAST/ELKSファミリーについてこれまでの成果の概略を紹介し、アクティブゾーンの生理機能と神経精神疾患の発症に関わる最新の知見を幾つか紹介したい。

第641回北里医学会招待学術講演会

(H26.8.18)

Myosin Superfamily: Its Role in
Cell Motility and Contractility

池辺 光男 先生
(テキサス大学東北医療健康科学センター
分子細胞生物学科・主任教授)

ミオシンは半世紀以上に骨格筋から発見されたモータータンパクであり、骨格筋細胞だけでなく、ほとんど全ての組織から発見され、細胞のさまざまな運動の調節に根本的な役割をはたしていることがわかってきた。さらに1980年代後半から始まったマウス並びにヒトの遺伝子配列の解析により、ミオシン類似の遺伝子がいくつも発見され、現在ではミオシンは20以上のサブファミリーからなるスーパーファミリーを構成していることが明らかになっている。

新たに発見されたタイプの“ミオシン”はUnconventional ミオシンとよばれており、いくつかの共通の性質がある。第一に、Thick Filament を形成せず、従って多くのミオシン分子が1本のアクチンフィラメントに同時に相互作用することはない。第二にこのタイプのミオシンの多くは張力発生よりも細胞内の物質輸送に適している。

Unconventional ミオシンの機能と調節メカニズムは、モーター活性の調節に加えて分子集合過程の問題など多岐にわたり、今後の研究に待つ所が多い。今回の講演では、第一にUnconventional ミオシンのリン酸化調節に関しての新しいメカニズムについて紹介する。第二にUnconventional ミオシンの機能と調節メカニズムについての最近の研究を紹介する。

第643回北里医学会招待学術講演会

(H26.10.23)

レジリエンス時代のうつ病: 医療人類学的視点から

北中 淳子 先生

(慶應義塾大学文学部人間科学専攻・准教授)

本講演では、1990年代以降のうつ病の世界的流行における、日本のうつ病言説の独自性について論じ、レジリエンスが求められる先制医療時代に、日本精神医学の臨床知が、グローバル・サイエンスをどう変えうるのかについて考える機会にする。

第646回北里医学会招待学術講演会

(H26.11.21)

メーヨークリニックの医療: 成功の秘訣と
耳鼻咽喉科・頭頸部外科への貢献

Kerry Olsen 先生

(Department of Otolaryngology-HNS,
Mayo Clinic, Minnesota, USA・教授)

米国の頭頸部癌機能温存治療の第一人者で世界のオピオイドリーダーの一人、メーヨークリニックでの耳鼻咽喉科・頭頸部外科治療の現状と将来像についてご講演を頂く。

第644回北里医学会招待学術講演会

(H26.11.13)

精神科医療機関における危険ドラッグ関連障害患者の
臨床的特徴

松本 俊彦 先生

(独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所自殺予防総合対策センター副センター長／薬物依存研究部診断治療開発研究室長)

薬物依存の対象薬物として危険ドラッグが急増している。危険ドラッグの使用に伴う身体症状や精神症状のために医療機関を受診する患者数も増加している。危険ドラッグを使用する人々の特徴は、覚せい剤、向精神薬に依存している人々とは異なる点があり、彼らを援助するためには理解を深める必要がある。本講演により救命救急センターと精神科専門外来において集積された危険ドラッグ使用者に関する知見を共有する。

第647回北里医学会招待学術講演会

(H26.12.5)

米国における最新の小児耳鼻咽喉科医療
～人工内耳と甲状腺腫瘍の臨床について～

Ken Kazahaya 先生

(Clinical Otorhinolaryngology, Head and Neck Surgery
University of Pennsylvania School of Medicine,
Pennsylvania, USA・Associate Professor)

全米トップランクの小児病院で行われている人工内耳手術について、その拡がりつつある適応を中心に概説していただく。また、近年日本でも注目されている小児甲状腺腫瘍のマネージメントについて、米国における最新の知見を講演して頂く。